

正世事情

初篇

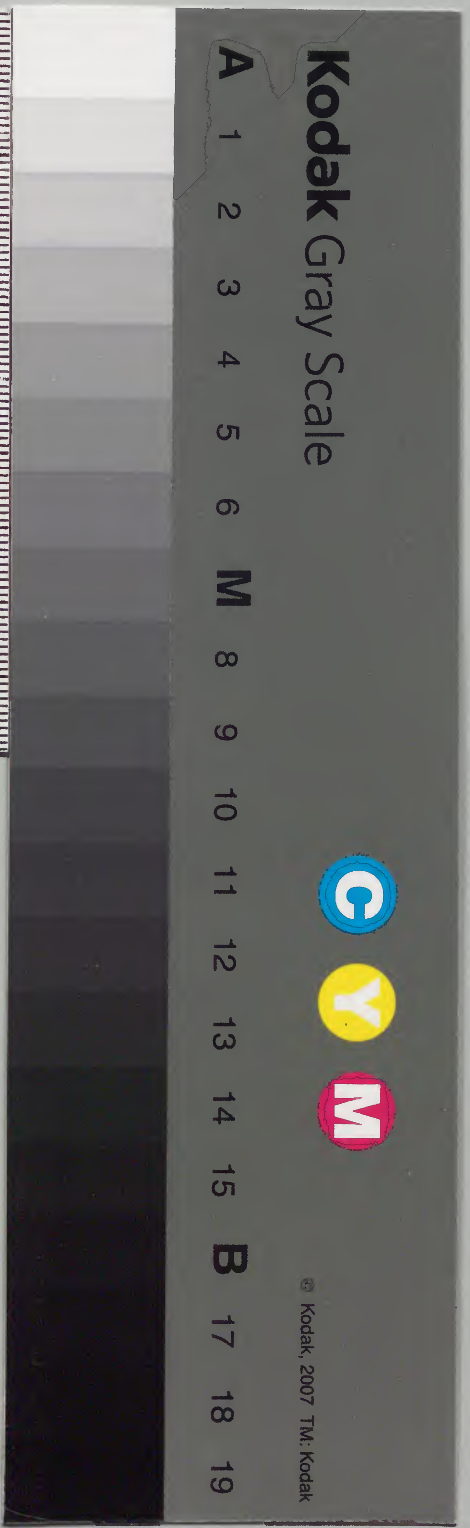
和書門
 一五三〇一
 一七四一
 六一
 六冊架函號類

內閣文庫
 和書
 一五三〇一
 六一
 三九函
 二四架
 六冊架函號類

內閣文庫	
番號	和 15301
冊數	6 (1)
函號	269 53

雜史十五三

269-53



明治六年癸酉九月發行

官許

初篇

近世事情

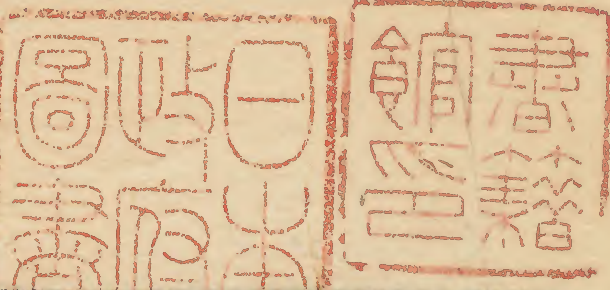
大角氏藏版

近世事情序

官許

淺草文庫

余自總角嗜讀國史于茲二十餘
 年每恨多近史之垂以戒于後世
 者今須又改轉後洋書日夜勤苦
 而未得窺其室內者乎惜也夸
 父道日影適米利堅人達米斯慕
 翁語余曰汝老矣則不能順踏西洋
 學課必也然人各有能慎勿自棄



夫英有克約得氏開化史以邁爾
斯氏自助論皆後之使人奮發立志
遂成大業之書也。則教年年少人
等加焉。宜汝得此書。以學道。豈無
少補哉。於是余以為自助論既有
中村敬字先生譯述。至矣盡矣。固
非余輩所及也。如開化史。雖未沙
可存之者。姑置之。今倣之。體裁粗

叙分船泊爾來之顛末與中興
一新以還之變革。以要覽致夫今
日之拜化者。實由于人之勤勉忍
耐之力。而非容易之可也。苟後此
書者。欲興起奮勵。各勉其實效。若
進格盡之。則余之願何以不為
矣。夫如此。而後譯拜化史。未勉
矣。余也才疎後陋。而敢所以不

辭者蓋亦欲可負為并一化之矣
可。

明治六年夏八月

對灣山田敏識



例言

一此書ハ英人「ギージョ」ト氏ノ開化史ニ倣フテ
我近時ノ開化ニ進歩スル履歴ヲ觀ルコトヲ
要スレバ序論ニ先ヅ今ヨリ凡二百七十年以
前ニ始テ外船ノ本朝ニ入ルヲ記シテ既ニ其
來ル久シキヲ示シ寛政以後ニ至テ外船ノ出
入極テ多ケレバ即チ其元年ヲ舉テ提頭トナ
ス固ヨリ敢テ本朝ヲ以テ言ハバ賴史ノ平氏
西土ヲ以テスレバ温史ノ威烈王ヨリ筆ヲ下

近世事情 卷之一 例言

スノ例ヲ企望スル所ニアラザルナリ
一此書名クルニ事情ヲ以テスレバ一家ノ私言
ニシテ編年ノ正體ニアラザルヲ論ヲ換々ガ
レドモ書中一々帝王ノ年號幾年幾月ヲ以テ
事ヲ紀スルモノハ事蹟明瞭條理貫通ナラン
イヲ欲スルノミ
一公文上書ノ冗長ナルモノ皆之ヲ刪去シ以テ
其概略ヲ舉クレドモ外國人ノ應接並ニ建言
ニ至テハ頗ル開化進歩ノ一斑ヲ窺フニ足ル
故ニ務テ之ニ斧鉞ヲ加ヘズ多キモノハ兩三

葉ヲ滿タスニ至レド敢テ請フ讀ムモノ白日
眠リテ生ズルヲ勿レ
一提書闕字ハ古史ニ無キ所ナルガ明清ニ至リ
稍之ヲ為スモノアリ本朝ニモ亦之ニ倣フモ
ノ多シ是レ臣子ノ禮ナレドモ畢竟佞諛スル
ニ近クレバ此區々ノ冊子ト雖モ今敢テ後ハ
一事蹟ノ頗ル天下ノ變遷ヲ觀ルニ足ルモノヲ
一潦寫ノ敘事中ヨリ抽出シ以テ綱領條目ヲ
舉グ是レ亦閩外ノ家乘ナレバ私意ヲ以テ惟

三十一
卷之一例言

此書ヲ讀ムモノニ便スルノミ
 一外國ノ國名ハ英吉利ハ「英」米利堅ハ「米」ヲ以テ
 スル如ク獨リ其一字ヲ記スルモノハ簡約ヲ
 尚ブナリ他皆之ニ倣フ
 一近世ノ事ヲ録スル書ハ槩子杜撰ノ巷説ニ出
 ズレドモ其中特ニ實蹟精覈以テ根據トナス
 ベキモノ亦多クレバ乃チ彼此參考シテ此書
 ヲ作ル但事件ノ遺漏ハ幸ニ博雅ノ君子之ヲ
 補正セヨ

此篇寛政元年ヨリ安政六年ニ終リ後篇萬

延元年ヨリ明治二年再ビ東京ニ幸スルヲ
 以テ終リトナス而シテ未ダ稿ヲ脱セザレ
 バ數月ノ後發兌セン

近世事情例言了

近世事情初篇卷一綱領目錄

一寛政元年ヨリ安政四年ニ至ルマデ六十九

年間ノ外國事務ニ関スル紀事

魯使「レ」サノツト長崎ニ来リ鄰國ナル「レ」

ヲ論ズル事

肥田豊後守頼常「レ」サノツト「レ」ヲ服従セシ

ムル事

頼常「レ」サノツトノ上陸且ツ其船ヲ修理

セント請フ時専断スル事

頼常又「レ」サノツトノ炮發スル時ニ臨ミ

智辨「レ」ヲ以テ之ヲ感服セシムル事

魯人蝦夷「カ」ラフト「レ」ヲ掠メ戊卒ヲ拘ヘ去

ル事

魯人同リイシクニ来リシ時戊卒等虜ハ

人ヲ執ヘシ事

魯人再ビ来リテ虜ヲ請フ時戊卒ノ勇断

並ニ淡路人高田屋嘉兵衛事

蘭人長崎ニ来リ交易ヲ開クベシト忠告

スル事

高嶋秋帆等ノ禁錮セラル事

米國水師提督「ペル」リ浦賀ニ来リ中嶋三郎等ニ接スル事
熊本侯自ラ米船ヲ討ント請フ柳川侯モ亦之ガ先鋒タラント請エル事
水戸老侯舉ラレテ幕議ニ参スル事
林大學頭等「ペル」リニ接シテ其國書ヲ受クル「」並ニ國書ノ略
「ペル」リ加奈川ニ突入スル時吏ノ詰問スルヲ抗辯シ以テ歴スル事
清國朱賊ノ亂狀

魯國水師提督「フ」リ「チヤチン」國書ヲ奉ジ長崎ニ来ル事
名護屋侯紅毛ヨリ輸入ノ物品ヲ代ント建言スル事
江戸木商源八防海策ヲ建言スル事
「フ」リ「チヤチン」ニ與フル答書ノ略
蕃語ヲ禁ズル告諭ノ文
家定公征夷大將軍ニ任ゼラル、事
土佐人万次郎天保ノ末米國ニ漂流スル事

「ベルリ再び来テ答書ヲ促ス事
 熊本侯復タ自ラ米船ヲ討ント請フ事
 「ベルリ林大學頭等ニ呈スル書
 カ士小柳米人三人トカヲ角スル事
 「ベルリニ一二條ノ盟約ヲ許ス事
 佐久間修理吉田寅次郎等ノ獄ニ繫ル事
 並ニ寅次郎航海ノ機ヲ誤ル事
 豪商ニ納金ヲ命スル事
 英國海陸軍總裁「ステイルリング」國書ヲ
 奉シ来リ魯國ヲ伐ツニ應援ヲ請フ事

魯船大阪海口ニ突入シ上書スル事
 「フーチヤチント兩三箇條ヲ約スル事
 梵鐘ヲ毀テ巨炮ヲ鑄ルベシトノ勅詔智
 恩院毀鐘ノ一ヲ拒ム上書ノ略
 米人上書シテ海岸測量ヲ請ヘル事
 勝麟太郎等ニ航海術ヲ學バシムル事
 英米魯ニ許セル條約ノ書
 藤田東湖ノ小傳
 米人「ハルリス」下田ニ来リテ國書ヲ出シ
 全權公使ヲ命ゼラル、等ヲ言エル事

蘭人「カヒタン」交際ヲ慎ムベキ旨懇告ス
 ル上書ノ略
 水戸老彦父子上書シテ米使ノ登城ヲ拒
 ム事
 佐賀老彦モ之ヲ拒ミ却テ米船ヲ討シト
 建言スル事
 「ハルリス」阿片ノ害并ニ條約ノ利益ヲ述
 テ其懇願ヲ上言スル事
 薩肥等二十一藩蕃夷ノ猖獗ヲ述テ十年
 ノ土著ヲ請ヘル上書ノ略

信田仁十郎等「ハルリス」ヲ刺ストスル事
 「ハルリス」堀田備中守正篤ニ開港ノ便利
 ヲ説ケル事
 佐賀老彦和議ノ失體ヲ建言シテ亦退國
 ノ請ヘル事

卷二 綱領目録

一 安政五年ヨリ六年ニ至ルマデ二年間ノ紀
 事上ニ全シ

関白尚忠等幕吏ノ上金ヲ受ケザル事
 徳嶋侯建言シテ天下ニ先キダチ輦轂ヲ

護セント請ヘル事並ニ藤原政通ニ呈ス
ル書
傳奏等三旨ヲ正篤ニ傳フル事
正篤奏對シ今計ハ和議ニ如カズト言フ
事
正篤源建通ノ奮言ヲ懼レ旨ヲ奉スル事
幕府人心ノ向背ヲ操制セント奏スル事
万里小路大納言中山權大納言等幕府ニ
依頼スル勅報ヲ拒ム事
万里小路大納言武備嚴整ノ日ヲ俟テ夷

虜ヲ討ント請フ建言ノ略
中山大納言勝敗ハ天命ナルヲ以テ現今
宜チニ攘夷セント請ヘル上書ノ略
都筑村重自殺スル事
諸藩ニ建議セシムベキ勅報並ニ朝紳等
三篤ヲ詰問スル事
久我家苞直公行スル時專決スル事
條約ノ延期並ニ「ハルリス」條約ノ利害ヲ
激論スル事
「ハルリス」ニ與フル條約延期ノ答書

僧月性ノ小傳
 米魯人來リテ英佛ノ將ニ來侵セントス
 ルヲ忠告スル事
 米國條約ヲ新ニスル事
 幕府大ニ嗣事ヲ議スルヲ并ニ水戸老侯
 等井伊中將ト抗論スル事
 幕府紀伊宰相ヲ迎テ世子トナス事
 幕府三家ヲ疎斥スル事
 勅シテ大老三家ヲ召ス事
 魯國條約ヲ新ニスル事

英國條約ヲ新ニスル事
 水戸老侯ヲ他藩ニ幽セントスル事
 水戸老侯ニ幕府ヲ佐リベキ勅詔ノ略
 英米魯佛蘭五ヶ國條約ノ書
 梁田星巖ノ小傳
 梅田雲濱ノ小傳
 間部下總守西上シテ京坂ノ有志輩ヲ執
 フル事
 家茂公征夷大將軍ニ任セラレ、事
 僧月照薩海ニ投歿スル事



長崎横濱箱館開港ノ公告

講武所教諭ノ文

暫ク幕府ノ所置ヲ觀ントノ勅詔

水戸黨ノ獄ヲ断ズル事

魯人暗殺セラル、事

新見豊前守勝麟太郎等米國使節ヲ命ゼ

ラル、事

橋本左内ノ小傳

頼三樹三郎ノ小傳

幕府高知老侯ヲ責ル事

支那人暗殺セラル、事

吉田寅次郎ノ小傳并ニ其父兄ニ呈スル

書ノ略

通計九十一章

近世事情初篇綱領目錄了

近世事情 卷之一

野史氏曰余近古ノ史ヲ讀ミ文運ノ益盛ニシテ
開化ノ益進歩シ以テ方今ノ形勢ニ至ル由来ヲ
觀ルニ蓋シ一日ニアラズ豊臣氏ノ衰世ニ當テ
既ニ其胚胎ヲナセリ抑後陽成天皇慶長五年即
チ関原ノ役アリシ頃ニシテ西洋紀元一千六百
年ノ時ニ英蘭二國ノ使船泉州堺浦ニ來泊シ通
信ヲ請フ奉行急ニ之ヲ江戸ニ報シ竟ニ其船ヲ

近世事情初篇卷一

對灣野史著

野史氏曰余近古ノ史ヲ讀ミ文運ノ益盛ニシテ
開化ノ益進歩シ以テ方今ノ形勢ニ至ル由来ヲ
觀ルニ蓋シ一日ニアラズ豊臣氏ノ衰世ニ當テ
既ニ其胚胎ヲナセリ抑後陽成天皇慶長五年即
チ関原ノ役アリシ頃ニシテ西洋紀元一千六百
年ノ時ニ英蘭二國ノ使船泉州堺浦ニ來泊シ通
信ヲ請フ奉行急ニ之ヲ江戸ニ報シ竟ニ其船ヲ

近世事情 卷之一

江戸近海ニ至ラシム時ニ彼船遠州洋ニテ激浪ノ為ニ破ラレ彼等乃チ上陸シ路ヲ東海道ニ取テ江戸ニ至リ其顛ヲ許サレ屢々登城シテ寄寓スルヲ殆ド一年其後同十三年蘭船再ビ肥前平戸ニ来リ互市ヲ請フ松浦肥前守之ヲ駿府ニ達セシカバ名徳公則チ其願ヲ許シ朱印ヲ賜フ是時始テ平戸港ヲ開キ通商ヲナサシム後チ寛永十八年ニ至リ平戸ヲ鎖シテ長崎ヲ開港シ且ツ蘭人ヲシテ毎年江戸ニ朝貢セシム是ヨリ下リテ荏苒ト一百四十七年ノ歲月ヲ送レルガ寛政

近世事情 卷之二

光格天皇
政和年
幕府二朝
二年蘭船
来泊ヲ始ス

以後ニ至テ稍事蹟ノ徴ス可キモノアレハ余ガ此書モ亦筆ヲ其際ニ下ヌ嗟夫レ今日ノ如キ開化ノ盛ナルニ推移スルヤ人カノ能ク維持スル所ニアラス然レモ昔日ノ不開化ヲ顧ミテ益今日ノ開化ヲ進メザル可カラズ故ニ史ヲ讀ムモノハ夫レ心ヲ此ニ留ムルアルカ○光格天皇寛政元年三月二日蘭使江戸ニ来リ將軍ニ謁シ時服三十領ヲ賜ハル○二年七月十日幕府蘭船ノ来泊スルヲ減ズ○是ヨリ先ニ蘭船ノ来リ互市スル其船毎歳二艘ヲ以テ限トナスヲ是ニ至テ

近世事情 卷之二 二

五年幕船蝦
身ニ来ル

一艘ニ減シ且ツ其輸入スル貨物モ亦大ニ減シ
年々ノ朝貢モ五年毎ニナサシム○五年九月三
日魯船一艘蝦夷子モロニ来リ通信交易ヲ請ヒ
且ツ天明ノ頃漂流セシ勢州人幸太夫ナルモノ
ヲ護送ス○十一月幕府石川將監村上大學等ヲ
蝦夷ニ遣リ此地ニテ通信等ヲ請フ可カラズ若
シ之ヲ願ント欲セバ長崎港ニ至ルベシトテ之
ニ入港且ツ其願ヲ許スベキ信牌ヲ與ヘケレバ
彼ノ船乃チ去ル○文化元年九月六日魯使「レサ
ノツト大船二艘ヲ率ヒ長崎神乃嶋ニ来テ曰奉

文化元年魯
船長崎ニ来
ル

肥田豊後守
幕府ヲ啓
使ニ告ク

行ノ指揮ヲ得テ江戸ニ詣リ將軍ニ謁シ國書方
物ヲ獻シテ貴國ト我國ト頗ル懸隔スレバ與地
圖ヲ按スルニ我領部ノカミシヤトツカハ蝦夷
ノ東北ニ當リ海上僅ニ一千里ヲ隔テ、兩國相
對シ固ヨリ鄰國ナレハ通信交易シテ互ニ相親
マザル可カラズ因テ之ヲ請ヒ且ツ曩ニ子モロ
ニテ通信ノ信牌ヲ賜ハレシヲ謝セントテ信
牌ヲ出シ其偽リナキヲ示ス此時是亦漂民仙臺
ノ舟子四人ヲ護送ス○奉行肥田豊後守頼常具
サニ之ヲ江府ニ報ゼシカバ幕府乃チ遠山金四

郎ヲ長崎ニ遣リ官舎ニテ彼ヲ諭セシム其官舎
クルヤ頼廢スレバ頼常近郷ノ豪富ニ命シ其持
スル金屏風ヲ出サシメ之ヲ装フ是ニ於テ金四
郎公使ト稱シ素袍長袴ヲ穿テ魯使レサノツト
ヨ官舎ニ召ヒ頼常ヲシテ之ニ幕肯ヲ告ケシメ
テ曰先年貴國ノ船蝦夷地來リシ時既に通信交
易ヲ許サザル所以ヲ審ニ述ベ且ツ今後國書等
ヲ帶ヒ來ルコ勿レト告グリ其時彼地ニテ未ダ
官府アラザレバ自今若シ漂民ヲ送リ來ルモ長
崎ニ至ルベシ即チ此港ハ外國事務ニ関スレバ

ナリトテ長崎ノ入港ヲ許ス信牌ヲ與ヘシナリ
然ルニ今又國書ヲ携ヘ來ルハ曩ニ告シ意ヲ解
セサルナラン是レ全ク域ヲ異ニシ風土人情ノ
同ジカラザルヨリ言語モ亦異ナレバ其意通ズ
ル能ハサルナリ然ラバ則チ通信ヲ約ストモ何
ヲカ為サン且ツ我國ニテモ古來ヨリ支那和蘭
朝鮮ノ三國ヲ除クノ外決テ外船ノ來泊ヲ許サ
ズシテ是レ歴代堅守スル所ノ定法ナリ夫レ交易
ハ互ニ利益アルニ似タレバ畢竟有用ノ貨物ヲ
失フニ至ラン故ニ是レ亦固ヨリ嚴禁アレバ其

顛波テ許スベカラズ然レモ今般船中ニ欠乏ス
ル薪水ヲ給ス可シ因テ速ニ退却シ爾來徒ニ万
里ノ波濤ヲ凌ヒテ再ビ來泊スルヲ勿レ是ニ於
テレサノツト俯伏シテ席ヲ退キ日アラバシテ
去ル○初メ魯使ノ神乃嶋ニ碇泊スルマ数月ヲ
經テ病ヲ發スレバ有司ニ就テ曰余昨年六月本
國ヲ出帆シ海上ニ居ルヲ凡十六個月ノ久キヲ
歴テ未ダ上陸シ地ヲ踏マサルヨリシテ遂ニ病
ヲ醸セリ顛クハ上陸ヲ許セヨ○時ニ公使金四
郎曰上陸ノ事嘗テ江府ヨリ嚴禁アレバ何等ノ

肥田屋後守
ノ事新

事アルトモ之ヲ許ス可カラズ頼常乃チ襟ヲ正
クシ起テ曰病ヲ以テ請エルニ許サバルハ不仁
ナリ又此ノ如キ嚴禁ノアルヲ聞カズト終ニ神
乃島ノ海岸ニ上陸シ以テ病ヲ養ハシム○数月
ノ後又請テ曰海上ニアルヲ日久キヲ以テ船底
破損セリ因テ顛フ之ヲ修理センヲ○此時モ
亦衆議紛々タリ頼常奮然トシテ曰縱令ヒ彼等
ニ上陸ヲ許サバル嚴令アルトモ之ヲ固守スル
時ハ彼般將ニ水底ニ沈没セントス苟モ人心ヲ
抱クモノハ人ノ疾スルヲ熟視スルニ忍ンヤ故

正世事情
卷之一

五十七
卷之一

ニ卑賤ノ漂民スラ斯ルヲアレハ輒チ上陸セシ
ハルニ況シテ彼等ハ魯國使節トシテ来レルモ
ノヲヤ他日此事ニ就テ嚴譴ヲ蒙ルトモ余一人
其罪ニ當ラント遂ニ吏ヲシテ往キ檢セシムル
一彼ガ言ノ如クナレバ彼等ヲ民家ニ移シ竟ニ
其船ヲ修繕セシメ急ニ此状ヲ関東ニ報ゼシカ
バ執政牧野備前守曰古語ニ邊境ノ奉行ハ機ニ
臨ミ變ニ應シテ事ヲ戢ク所スベシトアリ是レ
賴常ノ謂カト琴柱ニ膠セガルヲ賞ス○是月外
船ノ炮發スルヲ禁スル令アリシガ蘭船歸帆

執政呼備
前守

スルニ當テ日出帆ニ臨ミ炮ヲ發スルハ船ヲ速
ニ航セシメンガ為ノミナラズ實ニ船神ヲ祝ス
ルナリ嘗テ之ヲ發セザレハ洋中ニテ烈風激浪
ニ阻テラレ殆ド覆没ニ及ベリ今復タ何ゾ覆轍
ノ誤ヲ踏ンヤト終ニ炮發シテ去リケレバ蘭船
已ニ此ノ如クナルヲ以テ魯船モ之ニ倣ハンヲ
必然タリ然ラバ則チ嚴令ヲ如何セント衆大ニ
之ヲ憂フ賴常咄テ答ヘズ既ニシテ魯使將ニ去
ラントシ吏ニ就テ曰蘭國ハ我属部ニシテ卑賤
ノ國ナリ我國ニ至テハ君臣上下ノ道明ニシテ

近世事情
卷之一

肥田後守
を併

天子統ヲ継キ百官有司悉ク整ヘリ然ラバ蘭國
スラ炮發スルニ我等ニモ然ラザルハ何ゾヤ吏
以テ告グ頼常曰殿下ノ言ノ如ク蘭國ハ實ニ卑
賤ノ國ナレバ我國ノ彼ヲ遇スルヲ農夫ノ如シ
農夫ノ兵器ヲ弄スル何事カアラン因テ之ヲ禁
ゼス殿下ノ國ハ然ラス故ニ堅ク之ヲ禁ズ且ツ
殿下ハ重大ノ使者ニアラスヤ今其願ヲ容レラ
レザルニ若シ祝炮ヲ發セバ安クニ禮ヲ知ルノ
國ト謂フ可キカ然レ氏礼ナキ國ト謂ハレ且ツ
蘭國ト共ニ卑賤ノ國ト謂ハレント欲セバ炮發

三年夏蝦
夷ヲ掠ム

スルヲ適意ナルベシ更其サニ之ヲ魯使ニ告グ
レバレサノツト大ニ自ラ粗漏ノ言ヲ吐ケルヲ
慚チ且ツ奉行ノ巴ガ國ヲ賞重セシヲ悦ビ竟ニ
炮ヲ藏メ纜ヲ解ヒテ去ル○後チ頼常左右ニ言
テ曰レサノツトハ英明ナルニ依テ吾理ヲ以テ
スレバ服従セリ若シ無智固陋ノモノナラバ吾
如何トモスルナシ○三年九月十日魯船一艘蝦
夷カラフトニ来リ八百余人上陸シ戊卒四人ヲ
捕ヘ米粟ヲ掠メ去ル時ニ蝦夷ハ松前ノ管轄ナ
レ氏戊卒甚クシテ全島僅ニ三十人ニ滿タズ

近世事蹟
卷之一

其餘ハ皆土人ナルガ魯人之ニ抗セズ務テ戊卒
ニ攻撃シテ大ニ日本長崎ト呼フ蓋シ嘗テ来泊
セシ使節^レサノツト其望ヲ許シレザルヲ以テ
自ラ任ニ耐ザルヲ憾ミ歸途中其属部^カミシヤ
トツカニ着岸セバ曩ニ魯國ニテ豪侠ノ名ヲ得
タルミカライサタライチナルモノ王命ニ逆ヒ
會マ此ニ流サレケリ^レサノツト乃チ之ニ語テ
曰共ニ衆ヲ率ヒテ蝦夷ヲ掠メバ日本政府モ之
ヲ憂ヒテ必ズ我願ヲ許サン然ラバ是下モ亦之
ニ因テ其罪ヲ償ヒ本國ニ返ルヲ得ベシ是ニ於

四年
蝦夷の使

テ兩人相謀リ終ニ来リ侵スト云フ○四年四月
十三日魯船二艘再ビ蝦夷^エトロフヲ侵シ戊卒
三人ヲ捕フ○二十九日^シヤナヘ進ミテ益々狼藉
ス○是時南部津輕兩家此地ヲ戍^レル守衛ノ人
僅ニ二百人ニ過ギズシテ是^レモ四隅ニ分戍ス
レバ衆寡固ヨリ敵セザルニ炮聲天ニ轟ケバ戊
卒大ニ狼狽シテ逃走ス魯人乃チ官舎ニ就テ兵
器ヲ奪ヒ火ヲ放テ竟ニ松前ノ西方^リイシクニ
来リテ碇泊セル公船ヲ掠奪シ小艇ヲ以テ昔年
カ^ラフトニテ捕ヘシ吏四人ヲ上陸シ箱館ノ官

舎へ國書ヲ出シ通商ヲ請ハシメテ曰今若シ之
ヲ許サレバ明年必ズ軍艦數十艘ヲ以テ来リ
東西二嶋ヲ掠奪シ我属部トナサン○是月幕府
伊達佐竹兩家ヲシテ新ニ松前ヲ戌ラシメ且ツ
其近國ノ諸侯ニ防海ヲ戒シム○六月六日幕府
参政堀田根津守ニ命シテ蝦夷ヲ巡視セシム○
八年五月二十一日魯船一艘復タリイシクニ来
リ八人上陸シテ薪水ヲ乞フ○是ヨリ先ニ魯人
上陸スレハ速ニ執フベシトノ嚴令アリシヲ以
テ南部ノ戌卒乃チ之ヲ捕フ時ニ魯人船中ヨリ

九年幕府後
蝦夷ニ来
ル

九年幕府後
民ヲ送リ来
ル

稍抗スレ比其利ノ無キヲ見テ直チニ去ル而シ
テ戌卒等虜八人ヲ箱館ニ護送ス○九年十月二
日魯船一艘リイシクハ漂民藝尾ノ商人三名並
ニエトロフニテ執ヘシ吏一人ヲ送り来リテ曰
去年ノ虜八人ヲ許セヨ○戌卒之ヲ議シテ紛々
タリ一人アリ前テ曰急ニ之ヲ松前ニ報ズトモ
殆ド一月ノ時日ヲ費スベシ而シテ實際人数モ
少ケレバ晝夜防守ニ疲レ却テ大事ヲ誤ラン今
偽リテ曩ノ虜八人ハ既ニ刎首セラルト答ヘ
ナバ被忽テ怒テ上陸セン然ラバ則チ一炮發ヲ

蝦夷戌卒
勇新

近世事情 卷之二

煩ハシテ彼等ヲ鑿ニセン万一彼等ノ内ニ命ヲ
全シテ本國ニ歸リ軍艦ヲ率ヒ來ルトモ冬天嚴
寒ノ日ニ向テ海水モ亦堅氷ヲ結ハ、舟行自由
ナラズ且ツ彼レ再來ノ時ニ至ラバ松前ヨリモ
人数ヲ加フベシト衆議之ニ決シ以テ彼ニ告レ
バ則チ彼レ俄カニ帆ヲ揚テ去ル然レモ彼等尚
虜人ノ殺サレシヲ疑ヘリ○時ニ淡路ノ人高田
屋嘉兵衛ナルモノ常ニエト口ヲニ往還シテ其
物産ヲ輸出セシガ適マ此時モ航海スレバ彼レ
乃チ之ニ就テ虜人ノ安否如何ヲ問フ嘉兵衛其

淡路高田
屋嘉兵衛

恙ナクシテ松前ニ留ルヲ告ク是ニ於テ竟ニ
嘉兵衛ヲ携ヘ歸ラント請フ嘉兵衛逃ル、能ハ
サルヲ知り断然之ニ從フ○十年五月二十六日
象船一艘蝦夷ヒンヘコクノニ來リ去年連行セ
シ嘉兵衛ヲ護送シテ曰曩ニ貴國ノカラフト及
ヒエト口ヲ等ノ地ニ屢々來寇セシハ曾テ我國
王ノ知ラザル所ニシテ皆邊民ノ所為ナリ因テ
之ヲ嚴ニ罪シ自今復々決シテ斯ノ如クナラシ
メス故ニ伏テ願フ虜人ヲ許セヨ奉行服部伊
賀守速ニ之ヲ江戸ニ報ズ○六月二十一日奉行

十年春
嘉兵衛

近世事情 卷之二

幕命ヲ奉シ魯船ニ就テ曰昔年蝦夷ヨリ掠メ歸
リシ兵器且ツ嚮ノ米寇セシ謝罪ノ書ヲ帶ヒテ
當秋松前ニ來ルベシ然ラバ虜人ヲ渡サン○九
月十六日魯船一艘命ノ如ク兵器ヲ携ヘ箱館ニ
來ル○此時其方物數品ヲ獻ス○二十六日奉行
虜八人ヲ彼ニ渡ス○十月二十三日幕府井上佐
太夫ヲシテ相州浦賀豆州下田及ビ総房ノ海岸
ヲ巡察セシメ大ニ心ヲ防海ニ用ユ○十二月五
日幕府松平政千代松平金之助等ヲシテ蝦夷ヲ
戍ラシム○是年浦賀下田ニ砲臺ヲ築ク○仁孝

仁孝天皇
以元年

天保十一年

弘化元年
蘭船之忠告

三年

佛船初來

天皇文政元年八月十五日英船浦賀ニ來リ日ア
ラズシテ去ル○天保十一年正月蘭船浦賀ニ來
リ直チニ去ル○弘化元年七月二日蘭國軍艦一
艘長崎ニ來リ國書ヲ上リ忠告シテ曰方今ノ形
勢ニ當リテ西洋諸國ト盟約ヲ結ビ交易ヲ開カ
ザレバ各軍艦數十艘ヲ率ヒテ將ニ貴國ニ至ラ
ントス○三年四月二十一日幕府江川太郎左衛
門ニ命シ伊豆諸島ヲ巡察セシム○閏五月二十
五日米船二艘浦賀ニ來泊シ交易ヲ請フ許サズ
○六月八日佛船三艘始テ長崎ニ來リ薪水ヲ乞

高島秋帆
四ノ

嘉永元年
改元
ノ今アリ

二年

幕府蘭醫
ヲ禁ス

フテ去ル○七月二十五日幕府高嶋四郎太夫ヲ
岡部彦郎ニ神代徳次郎ヲ多固彦郎ニ禁錮シ其
黨二十餘人ヲ刑ニ所ス○四郎太夫号シテ秋帆
ト云フ嘗テ其長崎ニアルヤ始テ炮術ヲ蘭人ニ
學ビ頗ル其妙ヲ究ム故ニ銃法ノ本邦ニ流傳ス
ル秋帆ヲ以テ先著鞭ヲ得タリトナス○孝明天
皇嘉永元年戊申三月十五日詔シテ嘉永ト改元
ス○二十五日外船五艘食糧ヲ津輕ニ乞テ去ル
○是月外船頻リニ對馬松前海ヲ往返ス○二年
巳酉三月十五日幕府蘭醫ヲ禁ス○二十六日米

二年

幕府杜撰
ノ禁ス
五年

船長崎ニ来リ漂人ヲ載セ歸テト請テ○閏四
月八日英船浦賀ニ来ル○十二日英人下田ニ上
陸ス海岸巡察使江川太郎左衛門之ヲ諭シテ去
ラシム○五月幕府諸有司ニ命シテ海防策ヲ議
セシム○七月四日神代徳次郎多固郎ヲ脱シ京
師ニ詣ル○二十四日幕府之ヲ捕フ○三年庚戌
二月二十九日幕府石川土佐守等ニ命シ豆相房
總ノ海岸ヲ巡察セシム○九月二十日幕府臆断
杜撰ノ翻譯書ヲ禁ス○五年壬子五月二十四日
幕府下田ニ来リ肥前ノ漂民七人ヲ護送ス○六

近世事情
卷之一

六年米使
アリ来ル

年癸丑六月三日米國水師提督「ベル」軍艦四艘
五百六十余人ヲ率ヒ相州浦賀ニ来リ觀音岬ニ
碇泊ス○四日浦賀奉行伊豆守戸田氏榮其属吏
中嶋三郎香山某ヲシテ彼船ニ入り来意ヲ尋子
シハレハ乃チ答テ曰國書方物ヲ奉シ通信交易
ヲ請ハレガ為メ我王小臣ニ命シ貴國ノ重官ニ
謁シテ之ヲ獻ゼシメントス而シテ碇泊中人ヲ
シテ我船ニ近ヅカシムルヲ勿レ若シ然ラザレ
バ我能ク之ヲ禁制セシ三郎曰何ヲ以テ之ヲ制
スルヤ答テ曰炮ヲ以テ制スベシト意氣傲然傍

米使應接

諸慶堂
地ヲ成ル

細谷護上
書ス

栗濱鹿野所

二人ナキガ如シ○六日幕府新ニ石見守井戸錢
太郎ヲシテ浦賀奉行トナシ即刻發軔セシメ且
ツ在府諸族及ヒ諸有司ニ令シテ曰米國使節ノ
来意實ニ測ル可カラズ方一彼船品川ニ入レハ
乃チ急ニ登城ス可シ○七日幕府松平細川黒田
毛利蜂須賀立花酒井以下數十族ニ命シテ豆相
房総ノ海岸ヲ戌ラシム○是日方百間ノ假館ヲ
浦賀栗濱ニ營マシメ以テ接使ノ所トナス○八
日幕府使ヲ發シテ此状ヲ京師ニ奏シ水戸前中
納言源齊昭ヲ召シ復々幕議ニ参セシム○近衛

正事精
卷之一

水戸前納言

少將越中守細川齊護幕府ニ請テ曰癸藩ノ衆ヲ
師トシテ蕃船ヲ討滅セシト近衛將監立花鑑寛モ
亦先鋒トナリ之ヲ討シト請フ並ニ後命ヲ俟タ
シハ○齊昭字ハ子信辨シテ景山ト云フ幼名ハ
敬三郎哀公ノ弟ナリ文政己丑封ヲ襲キ從三位
中納言ニ任ス公人ト為リ英明果決其為ス所皆
人ノ意表ニ出テ夙ニ尊攘ヲ唱ヘ天保辛丑ノ年
公防海ノ為メ藩内ノ梵鐘ヲ鑄テ巨碩ヲ造ル等
ノ事ヲ以テ幕府其或ハ異志ヲ懷ケルヲ疑ヒ同
甲辰夏五月命シテ致仕セシメ駒籠邸ニ幽ス是

米國書翰

ニ至ツテ外夷ノ事起レバ復タ公ヲ起シテ之ヲ
諮詢ス○九日ニ奉行戸田伊豆守氏榮井戸石見
守某及ビ大學頭林健久里濱ノ假館ニ蓋テ使節
ニ接ス○ベルリ三百七十余人ヲ卒ヒ旗鼓シテ
詣リ書函并ニ洋帛名酒蒸氣船圖等ヲ献ス因テ
云フ願クハ將軍ノ前ニテ書函ヲ開ント其書ノ
略ニ曰抑我合衆國東西ハ大平洋ヲ界シテ西方
ニ貴國ヲ望ム而シテカリホルニヤヨリ火輪船
ヲ馳セバ則十八晝夜ニテ貴國ニ到ルベシカリ
ホルニヤハ我一大部ニシテ毎年黄金ヲ産スル

七世書翰

近世事情 卷之

四千万兩白銀寶石モ亦多ク産ス貴國ノ多産ナルトモ之ニ同シ若シ互ニ相ヒ往来セバ交ズ大利アラシク是ヲ以テ敢テ交易ヲ請フ先ツ互市ヲ試ル下五六年ニシテ貴國益アラザレバ宜ク速カニ之ヲ罷ムベシ又我商船ノ支那ニ至ルモノ及ビ鯨ヲ捕フ船ノ貴海ニ近ク時万一颶風ニ遭ヒ船破レテ窘スレバ請フ之ヲ救ヘヨ且ツ火輪船ハ毎子ニ石炭数万石ヲ費セヒ多ク載スルヲ得ザレバ途中ニテ欠乏ノ時若シ石炭ヲ買ヒ或ハ水ヲ求レバ請フ之ヲ與ラレヨ其直ヒハ銀錢

戸田氏榮井上某ベリニ接ス

雜貨ヲ以テ償フ可シ○幕府商議シ以為ヘラク太平二百餘年武備或ハ欠懈スレバ須ク大ニ之ヲ修メテ後チ答フヘシ○十一日幕府戸田氏榮井戸某ヲシテ「ベリ」ニ報シテ曰明年長崎滞留ノ蘭人カヒタシヲシテ答ヲ傳ヘシメシ宜ク速ニ船ヲ還スベシト仍テ和錦葵椀烟管團扇雜及ヒ其卵等ヲ賜フベリ謹テ命ヲ奉シ更ニ曰往年屢々入泊スルモ亦互市ヲ請フ為メナリ若シ之ヲ許サレバ請フ一小嶋ヲ借リ商館ヲ建テ常ニ五十人ヲ賃トセシ○十二日米艦四艘俱ニ去

近世事情 卷之一

ベリ去ル

ル○初メ米艦ノ浦賀ニ泊スルヤ時々空炮ヲ發
チ又隸卒上陸シ野燧ス船ヲ還サント欲スルニ
及テ俄カニ加奈川ニ入りテ測量ス吏之ヲ詰ジ
レバ「ベリ」答テ日若シ交易ヲ許サレバ軍艦
數十艘ヲ以テ来ラン其時吾之カ先鋒ヲラン故
ニ豫メ溪淺ヲ量ルナリ○十三日所司代淡路守
脇坂安宅幕使ノ入京セルヲ以テ急ニ米國ノ事
ヲ奏ス○帝大ニ之ヲ憂ヒ玉フ○十五日七廟ノ
祝人七大寺主ニ勅シテ夷船退去四海靖寧ヲ祈
ラシム○十六日三家並ニ溜詰諸侯幕府ニ米艦

ベリ執符ハ

詔ヲ七廟ニ
寺ニ四海靖
寧ヲ祈ル

清國乳狀

ノ退去ヲ賀ス○是月長崎奉行志摩守牧義制清
船告ル所ノ去歲ノ乳狀ヲ幕府ニ上言シテ曰高
平縣ノ豪商朱天徳郷民ノ窮困スルヲ以テ財ヲ
散シ之ヲ濟フ時ニ群盜アリ夜天徳ヲ掠メント
ス人以テ天徳ニ告テ曰闔邑君ノ為ニ疾禦セン
トス天徳曰財ヲ失フハ人ヲ失ニ勝レリ宜ク盜
ニ悉ク吾財ヲ奪ハシメテ邑人ヲ全フスニシ盜
之ヲ閉キ愕然トシテ曰仁人ナル哉ト遂ニ掠メ
ズシテ去リ後チ屢々天徳ヲ訪フ縣令之ヲ疑ヒ
天徳ヲ囚ス盜其罪ナクシテ獄ニ繫ヲ傷ミ乃チ

近世事情 卷之十一

將軍薨
幕府米國ノ
書ヲ諸侯ニ
移ス
魯國水師提
督來ル

獄ヲ毀テ天徳ヲ奪ヒ山ニ返リ之ヲ立テ、王ト
ナス民争テ蟻附シ屯戍方十里ニ滿ク清帝兵ヲ
發シ之ヲ征討スレバ賊勢甚熾ニテ克ツ能ハズ
近頃賊既ニ十二三州ヲ陷ルト云フ○二十二日
從一位左大臣征夷大將軍薨ス年六十一○七月
朔幕府米國ノ書ヲ諸侯旗下ニ廻達シ因テ曰米
國ノ乞フ所ハ容易ナル事ニアラザレバ互ク此
書ヲ熟讀シテ是非得失ヲ建白スベシ○十七日
魯國水師提督「ブーチャチ」軍艦四艘六百九十
人ヲ師ヒ長崎ニ來泊ス○福岡佐賀大村五嶋等

魯國書翰

ノ諸藩士卒ノ護シ之ニ備フ奉行先後守水野忠
篤属士ヲシテ之ヲ問ハシムレバ國書ノ奉シ來
レリ貴國ノ重臣ニ謁シ之ヲ獻セント答フ忠篤
乃チ其書ヲ受ク略ニ曰兩國ノ人民ヲシテ和親
ヒシメンガ為メ懇ニ三大事ヲ乞フ其一ハ則チ
自今條約ヲ盟ヒ鄰國ノ好ミヲ修メンニハ則チ
「カラフト」ノ如キ貴國ノ極北ト我邦ノ極南ト相
ニ錯ル所ノ界ヲ正シ邊民ヲシテ利ヲ失フコト勿
ラシメン三ハ則チ市ヲ貴國ノ海口ニ開キ貨物
ヲ交易セシ及ビ我船ノ米國ニ往クマ急アリテ

近世事情 卷之十一

近世事精 卷之十一

星出ツ

薪水食糧ヲ貴國ニ需メバ則チ之ヲ給ヘヨ
○或ハ云フカラフト中ノ我疆内ニ多ク石炭ヲ産ス
故ニ魯人之ヲ奪ント欲シ其正界ヲ乞フ○是昏
孛星西北ニ見ル光込四尺許リ二十一日ニ至テ
乃チ見ヘズ○八月六日帝前内大臣藤原實堅寺
ヲ江戸ニ遣リ大將軍ニ太政大臣正一位ヲ贈リ
謚ヲ賜テ慎徳院ト云フ○是日幕府炮臺ヲ品川
海ニ築ク又高島四郎太夫ノ禁錮ヲ解キ江川太
郎左衛門ニ属ス○十日幕府始テ諸侯ノ火器ヲ
齎ラシテ江戸ニ入ルヲ許ス○是月尾張權中納

慎徳公

尾張中納言
上書ス

本商源ハ上
言ス

天下大事

幕府參使
答フ

言源慶怒幕府ニ上書シテ紅毛ノ雜貨ヲ停メ之
ニ代ルニ大炮軍艦ヲ以テセン一ヲ請ノ○江戸
ノ本商源ハモ書ヲ市聽ニ上テ水塞水柵ヲ海口
ニ設テ外船ノ突入ヲ禦クヲ請ヒ因テ其方略ヲ
献バ○時ニ五月ヨリ天下大ニ旱シテ此月ニ至
ル○賀茂川ニ船ヲ漕セバ宇治川ニ瀬窟見レ龜
石出ツ○十月幕府紅夷ニ命シテ蒸氣船及ヒ兵
艦等數十艘ヲ上ラシメ因テ言フ明年船来ノ次
デニ之ヲ納レヨ而シテ諸艦空虚ヲ以テ漕シ難
ケレバ土苞ヲ載セヨ○晦日大目付肥前守高井

近世事精 卷之十一

政憲勘定奉行川路聖謨等長崎ニ遣リ閣老ノ答
書ヲ魯國使節ニ賜フ略ニ曰貴國兩國邊境ノ錯
雜ヲ釐正セント欲シ又好意ヲ以テスルニ我邦
何ゾ好意ヲ以テセザルヲ得ンヤ然レ經界ノ事
ハ必ズ圖籍ヲ按シ確乎タル憑據アリテ毫モ疎
繆アラズ且ツ交易往來ノ事ハ祖宗ヨリ嚴禁ア
リ歷代遵奉シテ失ハザル所ナリ故ニ嘗テ貴國
互市ノ請アレバ既ニ固辭ス方今宇内貿易ノ風
駁々日ニ長シ頃日合衆國モ亦來テ之ヲ請フ但
シ彼ヲ許シ此ヲ容レバ萬國ノ互市ヲ請フモノ

必ズ踵ヲ接テ至ラシ然ラズ我一國ハ力ヲ盡ス
レ豈ニ能ク星羅碁布ノ列國ニ應承スルヲ得ン
ヤ且ツ我境内ノ物産ノ如キ其多寡ヲ檢スルモ
亦豈ニ一朝ニ之ヲ辨ゼシヤ而シテ斯ク如キ至
重至大ノ事件ニ必ズ之ヲ京師ニ奏シ之ヲ諸侯
ニ諮リ三五年ノ歲月ヲ費サシムルハ商議ニ決ス
ルヲ得ズ事稍遲延ニ似タリト雖モ請フ其期ヲ
俟州若シ衆議一定シ諸事整頓スルハ後ハ速ニ
其曲折ヲ盡シテ之ヲ報セシ○十一月五日幕府
蕃語ヲ禁シテ曰近來武門西洋ノ武事ヲ習ヒ其

幕府蕃語
禁ハ

近世精義 卷之十一

兵艦劍銃戰袍等ヲ摸ス是固ヨリ當今ノ緊要共
ル所ナレヒ器械ノ唱呼ニ至ルマデ漫リニ蕃語
ヲ用ビ唯奇ヲ悦ヒ新ヲ好ムノ弊習ノミ大ラバ
國光ヲ失フニ至ラン故ニ尔來皆國語ニ之ヲ譯
スベシ若シ譯シ難キモノハ別名ヲ設ケヨ○七
日幕府土佐ノ漂人万次郎ヲ徵シテ普請役トナ
ス○万次郎天保ノ末ニ漂流シ墨船ニ救ハレテ
竟ニ北亞墨利加ニ適キ救者ニ育ハル万次郎性
敏ニシテ游學六旬粗ボ之ニ通ジ救者ノ女婿ト
ナリ釣鯨ノ業トシ毎ニ大洋ニ航ス居ルヲ十三

上佐漂民万
次郎

歲近ント欲シ乃チ南亞墨利加ニ往キ温泉ニ出
ス所ノ沙金ヲ取テ路資トナシ返テ舅妻ニ復ク
沙金ヲ取ント稱シ航シテ流球ニ至リ遂ニ長崎
ニ歸リテ審ニ彼國ノ風土事情ヲ告グト云フ○
十四日幕府會津熊本萩鳥取岡山等ノ諸侯ニ命
シテ相房總武要衝ノ地ヲ戌ラシム○是日詔シ
テ權大納言右近衛大將源家定ヲ以テ征夷大將
軍トナシ内大臣ニ轉ス家定ハ慎徳公ノ第三子
ナリ時ニ年三十二○十二月十五日水戸前中納
言齊昭嘗テ其藩内ニテ鑄造セシ巨煩七十四門

家定公歌

水産實錄

近世精義 卷之十一

安政元年
ルミ再米ス

幕府ニ獻^ク ○安政元年甲寅正月十三日米使
ペルリ再ビ軍艦七艘六百數十人ヲ帥ヒテ浦賀
ニ来ル ○十四日本牧ニ泊ス 去年ノ答書ヲ促^ル
シ待テ十日餘ヲ送レ比幕議決セザルヲ以テ直
チニ江戸ニ来リ將軍ニ謁シ一言シテ決セント
廿七日竟ニ進テ神奈川ニ泊シ品川ノ炮臺ニ迫
ル 戸田氏榮等急ニ浦賀ヨリ返テ其國禁ヲ犯ス
ヲ誦^ク ヲペルリ乃チ答テ曰嘗テ家康公及ビ秀忠
公ノ駿府ニアリシヤ我邦ノ使者屢々謁見ヲ賜
ハリタレバ我等モ亦其例ニ倣テ拜謁ノ請ヲ謹

ベリ批論ス

廣慶樓
所
細川林護

カ之ヲ何ト言ハント毫モ退去ノ勢ナケレバ終
ニ假館ヲ造テ接使ノ所トナス ○二月少將越中
守細川齊護歿スヲ撰マ攻具ヲ備ヘ固ク幕府ニ
米國ノ使船ヲ討滅セント請フ許サズ ○十日大
朋及ビ二十二祠ニ詔シテ外夷ヲ伏シ國家ヲ安
ンズルノ祈ル ○是日幕府大學頭林健對馬守
井戸某等ヲシテ假館ニ遣リペルリニ接シ既ニ
畢テ之ヲ饗セシム是ニ於テペルリ上書ス略ニ
曰謹テ貴國我邦ト相親ムノ命ヲ領シ臣モ亦大
ニ之ヲ慶ス因テ泊船ノ薪水ヲ求ル之ヲ給セヨ

ルミ上書

世高請
廿一

曰ク士卒養生ノ故ヲ以テ上陸スルヲ許セヨ曰
ノ海岸ヲ測量スルヲ許セヨ我國ノ釣鯨夫等若
シ貴國ニ漂着セバ其欠乏スル糧食薪水ヲ給シ
且ツ之ニ撫恤ヲ加ヘヨ○十六日幕府米船ニ物
品ヲ賜フ中ニ米百斛アリ每苞五斗ヲ入ル角力
數十人ヲシテ之ヲ授ケシム時ニ白真弓ナル者
躬ヲ八苞ヲ舉テ運フ頂ニ其一苞ヲ戴キ掌ニ其
一苞ヲ踊ラス而シテ小柳ナルモノアリ亦然リ
米人大ニ其力量ニ驚キ有力ノモノ三人ヲ選ヒ
共ニ舩セント請フ小柳乃チ一人ヲ扶ミ一人ヲ

小柳米人三人
人方ヲ負ス

躰ミ一人ヲ揚グ米人皆掌ヲ拍テ嘆賞シ譯官ニ
向テ曰彼ノ多力ナル何ヲ以テ此ノ如キカ答テ
曰日本ノ美米ヲ食ヒ美酒ヲ飲ム故ナリ○二十
九日ベルリ林大學頭井戸某等數十人ヲ招キ舩
中ニテ之ヲ饗ス○三月三日林健井戸某等幕命
ヲ奉シテベルリニ假館ニ會シ其下田箱館ノ二
港ニ泊シ錢ヲ入テ薪水食物石炭ヲ求メ且ツ下
田ノ沙子嶋方七里ニ居ルヲ許シ又箱館ノ地
若干ヲ貸スヲ約ス○四月九日幕府掃部頭井伊
直弼ニ命シテ曰汝ガ家世々京師ヲ護ス自今上

米使齋

京師警衛

近世事情 卷之十一

國ニ急アラバ則チ急ニ之ニ趨レヨ是ニ於テ其
 羽田大森ノ成ヲ罷メ阿波守蜂須賀齊裕ニ命シ
 テ之ニ代ラシム○六日佐久間修理吉田寅二郎
 澁木松太郎ヲ獄ニ下ス○修理ハ象山ト号ス松
 代ノ人ニテ真田信濃守ノ家臣ナリ博學多才ニ
 シテ洋書ヲ讀ミ且ツ西洋銃法ヲ研究ス嘗テ其
 門人寅二郎ニ言テ曰近頃西洋ニテ蒸氣力ヲ發
 明シ海陸トモ之ニ因テ其便利ヲ得ル少カラザ
 レバ速カラバシテ諸國ノ富強ナルヲ企望スベ
 シ故ニ當今ノ男子タルモノハ身ヲ万里ノ外ニ

象山松代等
ノ由

松陰航海ノ
機ヲ誤ル

遊バシ宇内ノ形勢ヲ知ラガルベカラズ寅二郎
 之ヲ聽キ大ニ感發ス寅二郎ハ萩ノ藩士ニシテ
 松陰ト号シ頗ル書史ヲ涉獵シ詩文ヲ善クス嘗
 テ修理ニ就テ兵ヲ學ヒ心ヲ防海策ニ用ヒシガ
 適マ魯船ノ長崎ニ來ルヲ聞キ之ト共ニ航シ彼
 國ノ形勢ヲ察シ且ツ航海術ヲ研究セント欲ス
 ルヤ乃チ西國遊歷ニ託シ別ヲ象山ニ告ク象山
 其意ヲ悟リ詩ヲ作り艦ヲ典フ松陰益感憤シテ
 長崎ニ到レバ魯船已ニ退去ス是ニ於テ松陰再
 ビ江戸ニ詣ル又米船ノ下田ニ來泊スルニ會フ

近世事情

而レテ修理モ幸ニ横濱應接所護衛ノ中ニアレ
バ乃チ之ニ謀レ其策略一モ行レズシテ竟ニ
卒然ト夜ニ乘シテ米船ニ入り共ニ航セント請
フ米人敢テ聽カズ小艇ヲ以テ二人ヲ護送スレ
バ則チ其邦禁ヲ犯スヲ以テ捕ハル其一人ハ即
チ洪木松太郎ナリ是レ亦松陰ノ門人ニシテ同
志ノモノナリ是時修理モ其事ニ與謀スルヲ以
テ逮捕セラレ○是月品川海ノ砲臺一二成ル○
幕府城内近頃頻リニ炎焼レ且ツ海岸防禦ノ為
メ砲臺等ヲ築キ其費洪大ナレバトテ江戸及ビ

豪富納金

船ノ記号

鍋島齊正

大阪ノ豪富ニ命シテ金ヲ納メシム○五月五日
林健井戸某等「ペルリ」ニ會シテ米人ニ箱館ノ地
方五里ニ居ルヲ許シ尋ヒテ長崎ニ泊スルヲ
ヲ許ス○六月十日「ペルリ」下田ヲ去ル○十一日
日章ヲ以テ本邦総船ノ記号トナス○十三日必
將肥前守鍋嶋齊正砲臺ヲ長崎ノ神乃嶋伊王嶋
ニ築ク○十八日幕府其壯堅ヲ賞シ名刀ヲ賜フ
○閏七月三日米艦一艘下田ニ来リ漂民二人ヲ
護送ス○二人ハ越後石船郡ノ水手ナリ嘗テ漂
流シ是ニ至テ回ル○十五日英國海陸總兵官「ス

近世事情 卷之

英國書翰

テイルリング王書ヲ帶ビ長崎ニ來ル其略ニ
曰近來魯國猖獗シテ全歐洲ヲ吞併セントス故
ニ我國既ニ將ニ命シ師ヲ出シ海陸並ニ進ミテ
其罪ヲ問ントス或ハ貴國ノ近海ニ於テ兵ヲ交
ユルコトアラシク請フ急ニ臨テ薪水食糧ヲ乞ハ
何地何港ヲ論セズ之ヲ給セヨ且ツ今我國ト貴
國ト盟約シテ東西呼應ノ勢ヲナカバ魯國安ク
ニ能ク其凶虐ヲ逞レクスルヲ得ンヤ願クハ夫
レ急ニ熟議ヲ遂ゲテ報決ヲ賜ヘヨ○八月二十
三日幕府止コトヲ得ズシテ終ニ其長崎箱館ノ二

魯船大坂ニ
來ル

港ニ泊シ薪水糧ノ類ノミヲ給センコトヲ許ス○
二十九日英國使船還ル○九月十八日魯船一艘
南海ヨリ浪華港ニ來泊シ懺ヲ揚テ「ロシヤ」ト
曰フ蓋シ私法ノ草書ナリ魯人三十人許リ小艇
ヲ以テ河口ニ入り吏ニ拜シ書ヲ捧ク奉行之ヲ
受テ本船ニ還ラシム○二十日幕府和歌山郡山
明石尼崎高取岸和田等ノ諸藩ニ命シテ之ヲ海
岸ニ備ヘシム彦根藩士卒四千人郡山波龜山ノ
三處亦各士卒千余人ヲ發シテ京師伏見ヲ戍ル
○十月三日魯船退ラ加田浦ニ泊シ遂ニ南ニ去

諸藩大坂ヲ
戍ル

世帯書

卷之二

ル○十一月十八日幕府井伊直弼ニ命シ大内ヲ
常衛シテ本能寺ニ陣セシメ小濱修理太夫酒井
忠義郡山柳澤保徳ヲ之ニ副ハシム又篠山青山
淀稻葉等ニ命シ京師ノ七口ヲ戍ラシメ和歌山
ニ命シ炮臺ヲ加田浦ニ築キ徳嶋ニ由良港岩屋
ノ濱明石ニ明石浦ニ築カシム○二十二日詔シ
テ元ヲ改メ安政ト曰フ○二十一日筒井政憲川
路聖謨幕命ヲ奉シ魯國使節フチヤンチンニ會
シ下田長崎箱館ノ三港ニ泊シ錢ヲ入レテ薪水
糧食石炭等ヲ求ルヲ許シ又下田ノ大走嶋方

京師 謀衛

安政ト改メ

魯使 奉納

七里箱館ノ地方五里ニ居ルヲ許ス○二十三
日畿内東山北陸山陰山陽南海西海ノ七道ニ詔
シテ諸梵鐘ヲ毀チ以テ大炮小銃ヲ鑄造シ之ヲ
海邊ノ要地ニ備ヘ時ニ古名鐘宗寺ノ鐘報時鐘
ヲ餘ノ之ヲ全シ幕府ニ勅シテ公布セシム○二
年正月十日講武所ヲ設ケテ專ラ武術ヲ習ハシ
ム○三月三日幕府梵鐘ヲ毀ツノ詔ヲ天下ニ傳
フ智恩院闕ニ詣リ上書シテ曰昔弘安ノ頃蒙古
本朝ニ寇セシ時詔シテ天下ノ神社佛閣ニ就キ
之ヲ祈ラシムレバ忽チ神風激發シ百万ノ賊船

梵鐘ヲ毀ツ

講武所建ツ

智恩院上書

近世事情 卷之一

暖息ノ間ニ盡ク覆没セリ然ラバ今般夷船ノ来
泊スルモ亦舊ニ依テ大ニ之ヲ祈ラバ何ゾ此ノ
如キ豫備ヲナスニ足ンヤ○輪王寺モ亦上書シ
テ之ヲ拒ムレバ事乃チ輟ム○六日幕府天下ニ
令シテ戎器ヲ除クノ外銅錢錫鉛ヲ以テ諸器既
並ニ佛像道具ヲ鑄ルヲ禁ス○十三日米船二
艘下田ニ来リ上書シテ曰我船ノ毎ニ支那ニ往
還スル必ズ貴國ノ海邊ニ航スレバ海底暗礁ヲ
請ンジテ沈溺ノ難ヲ避ケザルベカラス因テ請
フ之ヲ測量セントテ許セヨ○幕ノ議以為ラク

米使上書

此事容易ニ許ス可カラズ故ニ今許サスシテ服
セザレバ使ヲ彼ノ國ヘ遣リ之ヲ告諭セント是
ニ於テ天下ニ令シテ益武備ヲ修ム○四月二十
五日陸奥守伊達慶邦ニ東蝦夷右京大夫佐竹義
睦ニ西蝦夷越中守津輕順承ニ箱館ヲ戌ラシム
○六月八日蘭國ノ使者長崎ニテ蒸氣船及ヒ小
銃ヲ上ル○七月二十九日幕府矢田堀景藏永持
亭次郎奥田主馬勝麟太郎等ヲ長崎ニ遣リ其運
轉等ヲ蘭人ニ就テ學バシム○八月十四日中将
薩摩守源齊彬其西洋ノ制ニ摸シテ造ル所ノ昌

幕府上書

源齊彬

五世書信 卷之一

平船ヲ以テ幕府ニ献シ仍テ名刀景光ヲ賜ハル
 ○二十三日幕府英米魯一許セシ条約ヲ公布ス
 ○魯ノ条約ニ曰第一條自今兩國互ニ和親スベ
 シ第二條エトロフ全嶋ハ日本ニ属シウルフ嶋
 ヲリ以北ハ魯國ニ属スカラフトニ至テハ他日
 ノ釐正ヲ俟タン第三條魯船破損セバ三港ノ内
 ニ於テ修繕シ且ツ其欠乏スル薪水食糧ヲ給セ
 ン然ラバ金銀雜貨ヲ以テ之ヲ償フヘシ第四條
 破船漂民ハ互ニ扶助各其本國ヘ送ラン第五條
 魯船來泊ノ時其國貨ヲ以テ物ヲ買フヘシ第六

英米魯條約

條非常ノコアラバ魯國官吏ヲ箱館下田ノ内一
 港ニ属スヘシ第七條兩國ノ官吏相ヒ會シ事ヲ
 議スル時穩和ヲ主トスヘシ第八條兩國ノ民若
 シ法ヲ犯スモノアラバ各其國法ニ所スヘシ第
 九條兩國固ヨリ近鄰ナル故自今互ニ他國ヘ許
 ス事件アラバ必ズ先ツ之ヲ報知スヘシ○英ノ
 如キハ三港ノ内未ダ下田ヲ許サザルノ外条約
 ハ大抵魯國ノ箇條ト大同小異ナリ米國ニテハ
 其条約魯國ニ異ナルヲナシ○十月二日夜江戸
 地大ニ震ス城多ク東北ニ壞レ諸侯ノ邸士民ノ

江戸地震

近世專作
卷之一

屋舎倒ルモノ無算且ツ大火アリ是日歴成スル
モノ十万人ニ過クト云フ水戸藩藤田虎之助モ
歴成ス虎之助東湖ト号ス其人ト為リ慷慨ニシ
テ節義ヲ懐キ博ク書史ニ涉リ尤詩文ニ長シ閑
東文壇ノ淵藪タリ水戸前中納言ニ任テ戸田忠
敬等ト公ノ股肱タリ天保甲辰五月公ノ事ニ坐
シ罪ヲ幕府ニ得テ禁錮セラレテ三年而シテ後
チ宥サレ公ニ從テ江戸ニアリ是日ヤ地震スル
ニ當リ忽チ馳テ公カ燕室ニアレテ促ガシ公ヲ
庭ニ出サシム公出レバ則チ屋倒レ遂ニ歴成ス

幕府東湖

三年幕書調

未使ハルカス
来ル

將軍家系圖

年五十回天詩史等ノ著アリ大ニ世ニ行ハル○
三年丙辰二月幕府蕃書調所ヲ江戸ノ九段坂下
ニ建ツ○三河人箕作玩浦薩摩人松本廣安阿波
人高島五郎肥前人原田敬策備中人佐藤銀十郎
等十数名ニ教授ヲ命ズ○六月大政大臣政通関
白ハ辭ス○七月十九日米人ハルリス下田ニ来
リ國書ヲ奉シテ曰本國ヨリ全權ヲ任セラレ貴
國ニ在留スベキ命ヲ蒙レリ請フ之ヲ許セヨ○
是秘幕府炮臺ヲ大阪ノ海口ニ築ク○十二月十
一日鹿見嶋英女大將軍ニ嫁ス○四年丁巳正月

近世專作
卷之一

四年前全
書入

強大ノ國

東方ノ癖

五日長崎在留ノ蘭人カヒタン上書シテ曰ク貴
國近頃下田箱館長崎ノ三港ヲ開ヒテ魯英米ノ
三國ニ來泊ヲ許シ且ツ條約ヲ結ハ、未ダ互市
ヲナサズ味之ヲ許ス亦近キニアラン而シテ佛
人ノ來ルヲ未ダ閉ザレ、是レモ數月ヲ出バシ
テ來ルニシ此四國ハ全地球中最モ強大ナル國
ハレバ交際ノ間慎マザル可ケンヤ元來貴國ハ
東方諸國ノ内一個ノ強國ニテ居民ニ英傑ノモ
ト多ク支那國ノ敢テ及フ所ニアラズ但シ東方
各國ノ人ハ大抵自ラ其國ノ強弱ヲ知ラバシテ

箱館通寶

唯他國ヲ賤ムルノ癖アリト閉ケルガ余已ニ貴
國ニ滯留シテ之ヲ察スルニ頗ル其癖アルヲ見
ル夫レ瑣小ノ事ト雖モ兵端ヲ啓クノ基トナテ
ニ曩ニ支那人如キモ此癖ニ陥リテ阿片ノ亂ヲ
起シ大ニ其領地ヲ失ヒ當今ニ至テモ尚其害ヲ
免レズ貴國ハ尤モ國富兵強ケレ、四境海岸ノ
國ナレバ豈之ヲ慎マザルヲ得ンヤ○閣老等皆
以為ク喋々然ト斯ク陳述スルハ蘭人ノ其頭意
ヲ遂ゲンガ為ナルヘシ○五月二日幕府奏シテ
箱館通寶ノ錢錢ヲ鑄テ之ヲ蝦夷ニ行フ○六月

箱館通寶

近世書

西民代

水戸中納言
及子

十三日暮人蝦夷ノ「テゴロ」ニ来リ經界ヲ定メン
トテ上陸シテ所々ニ徜徉ス○七月二十四日幕
府未使「ハルリス」ノ請ヲ聽テ之ニ面謁スト奏ス
○二十六日水戸前中納言齋昭其子推中納言慶
篤ト同ク幕府ニ上書シテ敢テ大將軍ノ米國使
者ヲ見ルヲ諫ハ又前関白政通ニ上書シテ之
ヲ見ルヲ止メシトテ請フ○時ニ米使「ハルリス」
強テ將軍ニ謁セント請フ幕議將ニ之ヲ許サン
トスレバナナリ○八月朔日幕府奏シテ所司代服
坂安宅ヲ老中トナシ美濃守本多忠民ヲ以テ之

鍋島齊正

ハルリス上言

ニ代フ○是日溜詰諸侯連署シテ大將軍ノ米使
ヲ見ルヲ諫ム○九月近衛少將肥前守鍋嶋齊正
幕府ニ上書シテ米使ヲ見ルヲ罷テ之ヲ征討シ
以テ嘉永以来ノ恥辱ヲ雪カント請フ○十月十
四日米使「ハルリス」下田ヨリ江戸ニ入り蕃書鞫
所ニ寓ス○十八日「ハルリス」閣老備中守堀田正
篤ノ邸ニ詣リ國書ノ副書ヲ出ス○二十六日「ハ
ルリス」又堀田正篤邸ニ詣テ曰我大統領モ近来
貴國ト盟約ヲ結ベバ其貴國ヲ慕フヲ懇切ナリ
是ヲ以テ嚮ニ上ル書モ亦之ニ随テ肝膽ヲ吐ケ

近世書

リ今又親ク其意ニ基キ茲ニ陣述シテ之ヲ詳ニ
セシ其略ニ曰合衆國ハ固ヨリ土ヲ他國ニ有ス
ルヲ禁ス是レ運輸ノ費アルノミニシテ却テ利
益ヲ失ヘバナリ故ニ諸邦ノ我部ニ属セント請
フモノ皆之ニ辭ス凡西洋各國モ五十年以來大
ニ開化ヲ進メ蒸氣船又電信機ヲ發明シ万里ノ
遠キモ數日ヲ出スシテ往返シ千里ノ遙ナルモ
瞬間ニ消息ヲ通シテ万國ノ交易益盛ナレバ彼
来リ我行キ世界中一旗ノ如クナラント欲ス然
レモ英國ハ其領スル東印度ニ魯人ノ蠶食スル

阿片

トヲ患ヒ近來佛國ニ一致シテ魯國ト兵端ヲ啓
ケリ夫レ魯國ハ滿州ヲ攻メ且ツ支那ヲ掠メテ
漸次東印度ニ及バ英國之ヲ禦クニ何如トモ
スルナキヲ以テ貴國所領ノ蝦夷松前ヲ得テ以
テ魯軍ヲ横絶セント欲ス貴國豈ニ之ヲ熟視シ
テ獨立スルヲ得ンヤ而シテ方今ハ英佛俱ニ兵
ヲ支那ニ送レルガ支那モ其望ヲ許サザレバ全
國終ニ二國ノ所領トナラン且ツ夫レ支那ノ日
々ニ衰ヘ乳ノ絶ヘザル所以ヲ陳セン嘗テ清國
阿片ヲ輸入ヲ許スハ三十年以前ノ頃廣東ノミ

ナレハ近來ハ然ラズ人々争フテ之ヲ嗜ミ毎年
之カ為ニ二千五百萬圓ヲ費セリ而シテ阿片ノ
害ヲナスヤ甚シ夫レ阿片ハ体ヲ弱シ精神ヲ耗
シ人ヲシテ惰怠無頼ナラシムレバ俊才モ愚人
トナシ豪富モ貧困ニ變シ加之ナラズ之ガ為ニ
其財ヲ失ヒ遂ニ盜ヲ為スモノ毎歲万人以上ヲ
算フルニ至ル何ソ其害ノ大ナル此ニ至ルヤ然
レハ英國ハ其利益ノ甚シキヲ以テ尚私ニ輸入
セリ貴國ヘモ亦之ヲ私メテ支那ニ於ケル如ク
利ヲ專ニセントス我大統領貴國ノ為ニ甚ダ之

ラ危ブメリ因テ英國ト交易スル時嚴禁阿片ヲ
禁ゼザル可カラズ嘗テ閉ク貴國ハ世界中最も
豪勇ノ多キ國ニテ戰時ニ臨ミ先ヲ争ヒ其勇ヲ
振ス然レハ勇ハ貴キハ術ノ貴キニ如カズ今貴
國ノ勇ヲ以テ英國ノ術ト戰ハハ必ず其利ナカ
ルベシ古諺ニ戰テ利ヲ得ルヨリ無事ニシテ利
ヲ得ザルニ若カバトアリ故ニ貴國先ツ我合衆
國ト盟約交易ヲナハバ縱ヒ英軍來テ此地ヲ奪
ントスルトモ何ゾ懼ルニ足ンヤ且以交易ハ
唯貨物ノミナラス新發明ノ器械或ハ物産等ニ

盟約交易
利益

テ國益ヲ興スモノアレバ互ニ相敵テ其利ヲ得
ルモノナリ是ヲ以テ交易益盛ナル岳隨テ兵亂
モ亦益稀ニシテ國々和睦スルニ至ラン且ツ又
盟約交易ヲナス利ノ最モ大ナルモノアリ最ニ
余貴國ニ來リシ時「シマム國ニ寄り盟約ヲナセ
リ其後チ佛人モ亦之ト盟ヒケレバ英人素ヨリ
之ヲ奪ハント欲スレ氏已ニ能ハズ東印度ノ如
キハ元來獨立國ナルガ曾テ外國ト同盟セザレ
バ一旦英人之ヲ攻ルトモ與國ノ助ルモノ無ク
シテ全國遂ニ英ノ所領トナレリ且ツ綴ヒ鎖國

マルトモ一朝饑饉アリテ豫備ノ米粟マデモ竭
盡セバ與國ノ來リ救ヲ俟タズシテ何ヲカ為サ
ン然ラバ同盟與國モ無カル可カラズ故ニ貴國
モ一旦他國ト交易ヲ開キ同盟ヲナサバ他日利
益ノ大ナルト實ニ測ル可カラズ又茲ニ大患ア
リ貴國ノ為ニ之ヲ忠告ス余曩ニ香港ニテ英國
ノ總督「ジョンホウリング」ニ面晤シケレバ彼ノ
言ヒケルニ余近日軍艦五十艘ヲ以テ日本ノ江
戸ニ往キ教所ニ交易場ヲ開キ又我領事官ヲ江
戸及ビ大阪ニ居ンテ強請セント欲セリ而シ



テ若シ之ヲ許サレバ忽チ炮聲ヲ裏カシ兵威
ヲ以テ壓スヘシト彼若シ来ラバ佛人モ共ニ来
ル論ヲ俟タズシテ知ル可キナレバ是レ真ニ懼
レザル可ケンヤ夫レ大統領ノ懇願セル四箇條
ヲ告ケン曰ク下田港ハ地所悪シク且ツ僻境ニ
テ交易ヲナスニ不便ナレバ之ニ代ユルニ加奈
川及び大阪港ヲ以テセン曰ク交易所ニ於テ商
館ヲ建テ商人ヲ住居シ貴國ノ商人ト自在ニ相
商賣スルヲ得セシメン曰ク米國領事官一人
ヲ江戸ニ居キ交際ノ事務ヲ司ドラシメン曰ク

米國ノ懇
願四ヶ條

商館ヲ造ラバ寺院モ亦無カル可カラズ故ニ我
國教ニ從テ之ヲ建シ今若シ此願ヲ許サバ速ニ
書ヲ英佛ニ贈リ之ヲ諭セン然ラバ彼等唯一二
船ヲ以テ来ルベシ○十一月六日鹿兒島熊本仙
臺金澤以下二十一藩共ニ幕府ニ上書シテ曰幕
令ニ寛永以前ノ例ニ依テ米使ヲ延見ストアレ
ル寛永以前ニ蠻國ノ来朝スル皆已ヲ卑シテ辭
ヲ譏リ以テ貢獻ス是レ素ヨリ本朝ノ規模タリ
然ル米使ノ航来スルヤ已ガ國ヲ尊大シ本朝ヲ
輕蔑シ恣ニ無道失礼ヲ言フ而シテ執政國禁ヲ

土藩上書

信田仁十郎以下三人

以テ之ヲ告諭シ彼奉ゼザレバ恐懼シテ為ニ其請フ所ヲ議ス故ニ今日ノ事アルニ至ル即チ蠻夷ニ辱カシメラル、是ヨリ大ナルハナシ因テ諸藩尚深ク先祖ノ名ヲ汚シ子孫ノ瑕ヲナスラ愧ヅレバ請フ米使朝府ノ日ハ連名ノ侍坐スルヲ免セヨ且ツ近來物價沸騰スレバ諸藩江戸ノ邸費及ビ會同ノ路費ニ疲レテ命ニ支リ難シ敢テ請フ寛永以前ノ例ニ依テ連名ヲ來年ヨリ十年ノ間土著シテ農桑ヲ勸メ兵學ヲ講シ万一ノ内変外患ニ備ヘシメン

○十六日水戸人

ハルリス登城ス

信田仁十郎堀口克之助蓮田藤蔵ハルリス刺ント相謀リ其夜潛カニ小川街ノ蕃書調所ニ入り之ヲ刺ニ垂ントシテ幕吏ニ拘ヘラル○二十一日ハルリス幕府ニ朝シ書ヲ献ズ大將軍大廣室ニ臨テ之ヲ見ル賜フニ時服十五領ヲ以テシ之ヲ聖堂ニ饗ス○十二月二日堀田正篤等ハルリスニ蕃書調所ニ會シ其懇告ヲ謝シ権リニ交易並ニ公使ヲ置クヲ許シテ曰公使寄寓ノ地所及ビ交易規則ノ条約ハ數日ノ後有司ヲシテ告シメン然レ我邦固ヨリ小國ナレバ三港ノ外

ハルリス應接

開港便利

他港ヲ開ク可カラズ故ニ開港ノ事件ハ許スベ
 カラズ「ハルリス」答テ曰謹テ命ヲ奉ゼン然レモ
 他港ヲ開カザレバ交易ヲ許サルトモ何ノ益カ
 アラン卿等既ニ交易ノ利アルヲ辨ジテ之ヲ許
 サバ開港モ亦利アルヲ論セン夫レ交易ハ互
 テ不足ノ物品ヲ輸入シ或ハ新發明ニシテ大利
 ヲ興ス器械等相教ヘテ人民ノ耳目ヲ開クモノ
 ナレバ所々ニ港ヲ開キ國中一般ニ之ヲ遍カラ
 シメザルベカラズ貴國ノ如キハ周圍凡八百餘
 ノ大嶋ニシテ唯僻境ノ三港ノミナラバ其物品

外事ヲ奏ス

ノ所々ニ分布セザル明クシ緘ヒ此邊境ニ於ケ
 ル港ヨリ三都府及ビ諸國ノ都下ニ之ヲ運輸ス
 ルトモ山川ノ遠キ人カ或ハ舟車ヲ用ヒバ其費
 莫大ニシテ却テ利益ヲ失ハシ伏テ請フ殿下能
 ク之ヲ諒察セヨ○十四日幕府大學頭林健目付
 津田半三郎ヲ西上セシメテ米國ノ事ヲ奏ス○
 是レ勅許ヲ得シガ為メナリ○十六日幕府米ノ
 國書並ニ「ハルリス」ノ言ヲ諸侯ニ示シ因テ曰米
 使ノ求ル所容易ナラザル一大事ナリ各所見ア
 ラバ速ニ上言セヨ○十八日大將軍黄金百圓特



服三千領ヲ水戸前中納言ニ賜テ旭日丸ナル
軍艦製造ノ榮功ヲ褒賞ス○是月肥前守鍋嶋齊
正幕府ニ上書ス略ニ曰米船内海ニ闖入シテ横
行スレモ幕下方今武家衰弱ハ故テ以テ國辱ヲ
忍ビ穩和ヲ圖ル亦良計ナル哉然レモ竊ニ聞ク
聖慮之カ為ニ惱メリト懼レザルベケンヤ方今
ハ實ニ國家安危ノ秋ナレバ不肖敢テ諸藩ト外
事ヲ計ラシト欲セルガ既ニ米使ノ朝府スルヲ
聞テ遺憾冷モ敵兵ノ後門ヲ破ルガ如シ故ニ今
ヨリ自國ニ退キ躬ヲ食ヲ足シ兵ヲ足スノ事ヲ

徳本正上

督シ以テ非常ノ役ヲ奉ゼント欲ス因テ請フ更
ニ土著十有八年ヲ許サンヲ○時ニ他藩モ亦
多ク營ニ請テ上書ス

近世事情初篇卷之一了

近世書情

此册中所附各書之目錄
其書名及卷數如下
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、

